

2013年5月19日

提言書

東北の子どもたちの声～私たちの経験を世界の防災へ～

2011年3月11日の東日本大震災で、私たちは岩手県、宮城県、福島県の3県で被災しました。震災後、これからの防災に関する取り組みをよくしていこうと、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンのワークショップに被災地の中高校生32名が参加し、話し合いをしました。

今回の震災で私たちは繋がりの大切さを再確認する結果になりました。

そこで、世界中の子どもたちが国境・人種・宗教の垣根を越えて協力し合える体制をつくってほしいです。自分と違う意見を持った人と話し合いをすることで視野が広がりより良い考えを持てます。これにより、今まで見えなかったものも見えてくるのではないのでしょうか？

各国からの温かい支援とたくさんの祈りに私たちはとても励まされました。本当に感謝しています。ありがとうございました。これからも世界と協力し、次は私たちができることをしていきたいと思います。だから、私たちも、世界の人たちの役に立てるように被災した中高校生で話し合い、世界の防災をより良くするための意見をまとめました。聞いてください。

1. 子どもの意見も聞いて、これからは活かしてください。

1) 子どもだからって言わないで

子どもの意見を聞いて終わりにしないでください

私たちは大人に自分たちの思いを伝えるために、会議や意見交換の場に参加しています。しかし、大人に私たちの気持ちを伝えても「検討します」と言われ、持ち越されることがほとんどです。その後の話し合いの進み具合についての報告も、私たちには届きません。子どもの意見を聞くだけでなく、実際に活かしてください。それができたなら、改めて会議や意見交換で話し合うことができ、次につなげることができます。

実際に私たちは意見を言うこと、そして行動をおこすことにおいて、大人子どもは関係ないと考えています。しかし、大人と子どもの区別をつける大人もいると私たちは思っています。大人は「子

どもだから」と言いますが、大人たちが区別をつけるせいで考えていることを実行せずにいることも事実です。

震災後、私たちは大人と一緒にまちづくりについて話し合いをしてきました。その活動の中で、「改めて子どもの参加、参画の必要性を感じさせられた。子どもは世間一般で思われているよりもずっと立派。素晴らしい考えを持っています。その考えを伝える場所さえあれば、子どもは大活躍できる。そのようなことを再確認させられました。」という感想が大人からありました。また、震災後、復興計画についての意見書を子どもまちづくりクラブのメンバーが町に提出しました。「町全体の意見も必要。未来を支えるのは今の子どもたち」ということで、町長さん方は「大人と話し合いをする場」を設け、「復興委員会」にも子どもを入れて話し合いたいとおっしゃってくれました。大人に自分たちの意見が伝わったから、大人たちの心を動かすことができました。だから、子どもだからって言わないで話し合いをすればより良いまちをつくることができると思います。

内陸では、子どもたちが「ボランティアに行きたい」と声をあげても、大人に「子どもだから行くな!」といわれ、実行できずにいました。大人が「責任をとれない」、「子どもたちだけだと不安」、「お金を出してくれるところがない」、と考えていることは私たちも分かっています。しかし、私たちが行くことで、同年代の人たちと交流を図り、心のケアにつながることもあると思います。そのためにも子どもたちがボランティアに行きやすい環境を整えてほしかったです。

意見を言ったり、行動をおこしたりしたい気持ちは、大人も子どもも関係なく一緒です。だから、区別をなくして、私たちの声に耳をかたむけてください。

2) 子どもたち自身の手で未来へ向けたまちづくりをするための環境を整えてください。

今回の震災で大人だけでなく子どもの目線からも防災に関する課題が見えてきました。未来のまちをつくるのは子どもたちです。未来を担う私たち子どもが、今後復興に携わっていくべきです。しかし、私たちが復興に携わりたいという思いがあっても、子どもが主体となって復興に携わる機会が少ないのが今の現状です。内陸に住んでいて、被害が少なかった人たちが被災地へ行き、被災地の子どもと交流する機会を大人が設けてくださることがあります。しかしそれはほとんど、大人が企画したことに子どもが参加しているだけです。子どもの意見は反映されていません。だから、私たちが被災地に向けて活動したいことは、大人の意見と食い違っていることがあります。

また、被災地では、子どもまちづくりクラブなど子どもたちがまちづくりについての話し合いに参加できる場があります。しかし、そのような活動では、参加できる年齢が限られていたり、学校や公民館などでのポスター（チラシ）の呼びかけが多くありません。また、親が「お金を取られるんじゃないか」「責任をとれないから」といった理由で、参加できない子どもがいます。そのため、限られた人だけが活動せざるを得ない状況になっています。このような環境の中、「自分も復興に携

わりたい！」と思っている子どもは少なくはないのです。だから子どもたち全体に広く情報を回してほしいです。

そして、子どもの意見を発信する機会と場所を与えてください。子どもが参加することによって、まちに愛着がわき大人になってもずっと住み続けていきたいと思えるようになります。子どもと大人が協力することによって、震災時や復興だけでなく、平常時のまちづくりについても子どもと大人が一体となって取り組むことができます。将来のために今、私たち自身で未来を切り開かせて下さい。

3)「聞く」、「話す」、「伝える」、「生かす」この4ステップを大切にしてください。

まず、「聞く」、「話す」について。話し合いの場では子どもだからということで子どもの意見がないがしろにされています。だから子どもと大人が平等な立場に立って意見を言い合わせてほしいです。子どもと大人の異なる視点からの、自由に想像力に富んだ意見や現実をしっかりと見据えた意見を合わせれば、可能性も広がってより良い意見が得られるのではないのでしょうか。『誰が言っているのかではなく、何を言っているかということが重要なのです。』

次に「伝える」について。私たちの意見は一部の人にしか伝わっていません。もっと広く知ってほしいと思います。だから、みなさんに私たちの意見を広く伝えてほしいのです。

最後に「生かす」についてです。今まで私たちは多くの意見を出してきました。しかしそれが生かされ、実現されたことはごくわずかです。すべてを実現してほしいとは言いません。しかし、「聞く」だけで終わらせないでください。組み込んで生かし、その途中経過を教えてください。

この4つのステップは、子どもだけですべてできるわけではありません。どうしても大人の力も必要となってくるので、実現させるための手助けをしてください。

2. 子どもが求める5つの支援を知り、行動してください。

1) 情報の公開をしてください。

災害中の情報の公開が不十分だったので、改善してください。

震災の直後、どこに避難をすればいいかの指示が明確にされず、あいまいにされていました。そのため、震災後に避難すべき場所に関する情報が本当かわかりませんでした。これは福島県でも、岩手県でも、宮城県でもいえたことです。福島県では、かえって放射線量の高い地域に避難してしまった人がいました。政府は、災害時に「同心円上で原発から半径なんキロの人は避難！！」という指示を出しましたが、実際は事故後の天候(風向きや雨雲)によって、各地域の線量は違っており、汚染地域は円上に広がっているわけではありませんでした。そのことについて、政府は緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム(SPEEDI)によってわかっていたようですが、3月23日までそれ

が公開されることはありませんでした。情報の中で、特に生命に関わる重要な情報は、決して一握りの人が握っていて良いものではないと思います。だから、政府の公式な情報をきちんと公開すべきです。きちんとした情報が流されなかったために、子どもたちを安心させ健康を守れる立場にある大人はその役割を十分果たせず、子どもたちの精神的なストレスは多大なものになりました。大人が混乱した状況にあると、子どもはさらに戸惑い、困惑して大きな不安を抱えてしまうことをきちんと認識してください。

災害後に必要な情報を収集し、それを発信してください。

実際に被災した沿岸部では、様々な情報が必要でした。震災直後は通信手段が途絶え情報を伝えるものが限られていました。平日だったために学校に行っている子どもが多く、家族の安否さえ分からない状況でした。安否が分からないがゆえに避難所などにいる人は不安なままでした。また、自分たちが必要としている情報が少なかったりと動けない状況が続いていました。

また、内陸の子どもが被災地に支援をする時、子どもをはじめとする被災された方々がなにを必要としているのかが分からないために困っています。国も同じように感じているのかもしれませんが、より被災した方の心によりそった支援がしにくい状況にあります。

だから、緊急時に備え、子どもも大人も意見を伝えられるように、市役所に意見箱などを設置してください。そして、そこで集められた人々の声を役に立て、人々が本当に必要としている情報をメディアから全国に伝えていってください。

2) すべての子どもが平等に保養に行ける機会をつくってください。

保養に行ったり、放射線の少ないところに行ったりすると、体の細胞、すなわち免疫力を回復させたり、精神的にもものびのびとするので、知らない間に放射能によって傷つけられている細胞を修復することができます。

小学生未満の子どもが保養に行くためには親が付き添う必要がありますが、親が働いていると、参加したくてもできません。小学生・中学生は保養に行くことができても、高校生は、高校生向けのプログラムが少ないので保養に行くことができません。放射線に対する意識が高い親をもつ子どもは保養に行くけれど、放射線に対する意識が低い親をもつ子どもは保養に行きません。

通常よりも、放射線の数値が高い地域の人、線量の低いところに行く必要があるのに、保養に行ける人と行けない人がいてもいいのでしょうか。日本国憲法に第14条に「すべて国民は、法の下に平等である」とあるのに、行ける人と行けない人がいるのは、平等と言えるのでしょうか。

もっと、親の意識にかかわらずすべての子どもが保養に行けるように、世界中で保養活動を支援してほしいです。

3) 離れ離れになった友だちと再会できる機会をつくってください。

震災で津波の被害にあったり、原発事故の影響で故郷に戻れなくなり、ずーっと一緒に過ごしてきた友だちと突然離ればなれになってしまい、一緒に過ごすはずだった学校生活を送ることができません。子どもが会いたいと思っても、親が子どもの健康を気遣って、放射線の数値が高い地域へ行くことを反対するなど、放射線に対する意識の違いによって、会うことのできない子どももいます。

故郷に戻れなくなってしまったので、友だちと再会できる場がありません。だから、移動にかかる費用を気にしないで参加できるイベントを催したり、集まれる場所をつくったりして、離ればなれになった友だちと再会できる機会をつくってほしいです。

4) 差別意識をなくすために交流できる場をつくってください。

その地域に前から住んでいた人と避難のために移り住んできた人との間で交流がないため、同じ地域と一緒に住んでいるのに、両方の間で差別意識が生まれ、それによって、トラブルが生じています。それを改善するためには交流をして、お互いを知り、コミュニケーションをとることが必要なので、交流する機会を設けてください。

5) 子どもの心を守るための対応をしてください。

1 つ目は子どもの心を守るためにカウンセリングを充実することです。理由は親や友だちを亡くした心の傷は一生治ることはないと思います。特に親を亡くした子どもは1人で家にこもって悲しんでいるよりも、1人の人間(カウンセラーなど)がいるだけでずいぶん違ってきます。カウンセラーには、他の人に話しにくいことも話しやすく、話していると気持ちが明るくなります。だから、カウンセリングをもっと充実させてください。

2 つ目は被災した子ども同士で自分の体験を話し合えるような場所をたくさん作ってもらうことです。大人たちに自分の気持ちをうまく伝えられない人も、そのような機会があれば「苦しい」とか「辛い」とかをきちんと話せるかと思います。それにより、自分の気持ちや心を整理することができます。心に余裕かできます。

3.子どもと一緒に、防災・災害時の対応を世界中でもう一度考え直して、実現させましょう！

1) 子どもの意見を反映した災害に強いまちづくりをしてください。

東日本大震災では、海沿いに建てた学校が被害を受けました。いくら建てる場所が無いにしても、津波が来る可能性のあるような場所に学校を建てることはなかったのではないかと思います。「もし

も」のことを考えて建てるべきだと思います。過去の教訓、今回の東日本大震災の教訓を生かしてこれからは公共施設を安全な場所に建てるべきです。学べる場である学校などの公共施設が、まだ機能していなかったり、仮設住宅に住んでいる人たちが不便なので、安全に過ごせる住宅（マンションや団地）を作ってほしいと思います。

福島では安全だといわれていた原発が、未曾有の大被害を招きました。その結果子どもが外で遊べる場所も住んでいる家も奪ってしまうことになりました。このような経験も日本全国、全世界の人たちに知ってほしいです。

このような私たちの経験や思いを国や県に伝えて、自分たち、子どもの意見を反映したより災害に強いまちをつくっていきます。

2) 社会的に立場が弱い、赤ちゃんから子どものことも考えて災害時の避難用具を準備してください。

災害時に避難用具の蓄えがなければ、真冬だと寒いし、ケガなどしても手当などができません。今回の震災でもストーブがなく、みんなで毛布にくるまっていたのですが、すごく寒かったです。今回の震災は冬でしたが、夏などちがう季節に起こるかもしれないから、備えは常にしておく必要があると思います。

また、子どもたちの中には、遊び道具をなくしてしまった子どももいて、持っている子どもから仲間はずれになってしまうこともありました。だから、遊び道具などの用意もしてほしいです。

また、赤ちゃん用の離乳食もなく、避難してからもなかなか物資が来ませんでした。まだ所々がれきが残っているまちは危険なので、赤ちゃんを連れ安全な道を優先して物資を遠くに買いに行かなくてははいけませんでした。

だから、社会的に立場が弱い、赤ちゃんから子どものことも考え、災害時の避難用具を準備してください。

3) みんなが災害について興味・関心をもてる安心・安全な情報を発信してください。

家族内で避難する場所を決めておく必要があります。東日本大震災の時は、家族同士の避難場所の確認が甘かったせいで、連絡もつかない中、安否を確認するのがとても困難でした。大切な人が近くにいな

かったり、安否がわからなかったりすると、誰でも常に不安な気持ちになってしまいます。

それから、学校と保護者が集まって、災害の時の対応について話し合う機会を設けてください。学校と保護者が連携して避難しないと、大勢の犠牲者をだす結果になってしまいます。

安全に避難するための情報をもっとたくさん設置してください。確実に安全な避難路や避難所にはやく逃げるために、みんなが見やすく分かりやすい看板など、目に見えるかたちで避難するための情報があれば安心できます。

世界中の人に災害について興味・関心を今よりももっともってもらうために、積極的に情報を発信してください。例えば、100個情報があれば、ある人は10個目に、またある人は99個目に興味を示してくれるかもしれません。少しでも興味・関心をもてることがあれば、災害に対する意識は大きく違ってくると思います。

4) 防災教育の強化・徹底をしてください。

日頃から避難訓練をしていた子どもたちは、震災当時、先生の指示にしたがい避難することができました。しかし大人の判断の違いにより、亡くなった子どももいます。だから、社会的に弱い立場の人まで防災教育が行き届かなければなりません。そのために、政府など、国、自治体で子どもを災害から守るための教育として行うことが重要だと私たちは考えます。

防災のことを子どもの頃に学んだか、学んでいないかで大人の判断の仕方が変わってくると思います。だから、子どもの頃から災害の知識を持つことが、防災教育の強化・徹底につながってくるのではないのでしょうか？

また、防災教育の一貫として、避難するレベルを自分たちで知ることができるような授業の取り組みもしてください。

すべての人が、災害・防災について学び、たくさん訓練することでもっと関心・知識を高めることが大切だと思います。

5) 子どもが主体で地域と一緒に防災マップ作成/避難訓練をしたいです。

大人が作った防災マップは、配布や掲示されていても知らない人が多く、見ることはできませんでした。また、漢字が多かったり、避難路が遠回りになっていたり、私たちには分かりにくかったので、見たとしても生かせないでいました。だから、子どもが中心となり、学校教育の一環として実際にフィールドワークに行ったり専門で研究をしている方から話を聞いたりしながら、子どもがわかりやすく興味をもちやすい、実用性のあるハザードマップを作りたいです。子どもが分かりやすければ、大人も分かりやすいと思います。

そしてそのマップを使い、地域の方みんなと一緒に、まち全体をつかった避難訓練がしたいです。先の震災では、避難訓練のように校庭に避難したものの、被害を受けた学校もあります。学校内だけでなく、近くの山などまちをつかった避難訓練もする必要があると思います。また私たち子どもと先生だけをするのではなく、地域の大人やお年寄り、私たちより小さな子どもなどみんなが避難

訓練をすれば、実際に震災が起きてしまった時でも慌てず冷静に対応できると思います。そして季節によって状況も変わってしまうので、もっと回数を増やせばいいと思います。

私たちは、このように考えたので、子どもと一緒に防災災害時の対応を実現するために、世界中のみなさん協力してください。

4. 震災の出来事を共有し合ってください、後世に伝えてください

1) 震災から2年たった今こそより多くの人に情報を共有できるようにしてください

震災から2年たった今、震災の記憶が風化しつつあり、防災に対して意識が低下してきています。そのような現状の中で、より多くの人と情報共有することが必要です。そのためにも、世界の人たちと情報を共有できる場をつくってください。

世界の人たちは、被災地の現状、被災者の思い、そして、日本の被災の経験から話し合われた意見を共有することができていません。私たちは世界で起きた災害が日本で報道されていないため、その被災地が今どうなっているのか、そして被災地の復興のために、どんな支援が必要なのか日本ではわからないでいます。だから、現在、日本で起こったあの震災について、世界で共有されているかどうかかわからないでいます。

これは国内に関しても同じです。被災地はもちろん、被災地以外での継続した情報共有できる場をつくってください。それは、行政だけに共有されれば良いのではなく、大人、子ども、すべての人を対象に、情報が共有されるものにしてください。

今はどうしても、被災地の声や、子どもたちによってつくられた提言などは行政にばかり向けられているように見られます。また、行政からの情報発信も遅く、例えば、どういう復興計画があるかということについても、市民には伝わるのが遅いです。そのため、それらは、一部だけのものになってしまっており、被災地の中でさえも、十分に情報が共有されていないこともあります。被災地外ではなおさら情報が共有されにくく、国民の震災に対する記憶が風化する主な原因となります。被災地の人だけが復興に携わるという状態をつくり、被災地外からの継続した支援を妨げることとなります。

そのため、それらを共有することによって、防災についての知識を深めることができ、また、震災のことについてもう1度考えるだろうし、復興に関しての意識を持続することにつながると思います。

他県、他国の人と意見交換できる場を増やしたり、メディア（新聞、フリーペーパー、TV、ラジオ、インターネット）を利用して、情報を共有すればよいと考えます。

2) 震災の経験を後世に伝えてください

私たちが震災で起こったでき事を知り、自分の住んでいる国、地域で起こりうる災害を見つめ直し、対策に努めてください。

なぜなら、自分たちは震災が初めての経験で、対応の仕方が分からなくて多くの犠牲者が出てしまったので、もし自分の国で災害があったら、その地域の人々自身に対応できるようにしてもらいたいからです。

今回、高台に逃げることを知っていた人は、逃げて助かりました。走って逃げることを知らないで車で逃げた人は流されてしまいました。「ここまで津波がきた」とか「ここが困った」とかちゃんと共有して、今回みたいなことが起きないように後世に語り継ぐ必要があります。そうすれば「もしも」の事態に対処することができ、なにより震災の怖さを語り継ぐことができるからです。

震災の記憶を残すために具体的な例としては大きく2つあります。

1 つめは、形として残していくことです。形に残していくことは見る人にも強い印象を与えて残した人たちがどんな思いを残したいのか伝わります。その方法として、まず津波模型があります。津波模型は自分たちが住んでいるまちの模型を作ってそこに水を流し込んで、津波がきたことを再現することによって津波がどこまできたのかなどその時の状況を分かりやすく確認できて、震災の記憶を風化させないことにつながります。次は、碑にして残していくという方法があります。しかし石碑だと作っただけでそれで終わってしまい時代とともに風化してしまっ最終的にその地域の風景になってしまいます。東北地方では、過去にも大きな津波がありその時に、「これより海沿いは、津波が来たため家を建ててはいけません。」と石碑を立て後世に伝えようとしていました。しかしその思いは今の時代まで伝わらずに、その石碑の言葉を守らずに家を建て今回の震災では大きな被害が出てしまいました。もし石碑にきざまれた言葉を意識していれば、犠牲者が出なかったと思います。だから石碑ではなくて、木で碑を建てれば震災の記憶を残せると思います。木だと腐ってしまうので何年か後に定期的に取り替えなければならないけれど、取り替えることで震災の記憶を忘れないきっかけにもなり、震災を知らない人にも伝わっていきます。

2 つめは文化として記憶を残すという方法です。メディア、踊り、歌、物語、伝説などを通して、被災地の現状や被災したまちの復興を多くの人に知ってもらおうとともに、これからの世代に伝えていきたいと考えています。

今回の震災で地域の伝統的な文化が消えかけている地域が多々あります。地域の伝統的な文化では、踊りや、歌、祭りなど多くありました。しかし、踊りや歌を披露する舞台が津波で流され、祭りを催す場所がぐちゃぐちゃにされ、地域の伝統的な伝統行事を行うことが難しくなってしまったのです。

しかし、私たちは津波によって消えかけている伝統的な文化を震災の記憶として残すよう復活させたいのです。なぜなら、地域特有の歌や踊りは、その地域に根付いたものであり、地域特有の魅力や躍動感があるはずで、被災地の現状や被災したまちの復興を、私たちの後世にその地域の文化として伝えることができれば、良いと思います。

「津波てんでんこ」という言い伝えがあります。意味は、「人にかまわず必死で逃げろ」というものです。その言い伝えは、昔の津波での経験が語り継がれてきました。このおかげで、犠牲者が最小限に抑えられたと聞きました。このように犠牲者が少なくすんだのは、昔の経験が次々と語り継がれてきたことによります。「津波てんでんこ」という言い伝えが人々を津波から守ったという実例も伝えていきたいです。

このように、被災地の現状や被災したまちの復興を私たちの後世にその地域の文化として伝え、再び今回のようなことがあった時に犠牲者を最小限に食い止めたいと思います。

以上が私たちの提言です。

岩手・宮城・福島震災を経験した私たちをはじめとする子どもの意見を世界中の復興、そして、これから起こることが予測される様々な災害への対応に役立てるためにも、大人が動いてください。もちろん、子どもである私たちも知恵を振り絞り、これからも故郷のため、世界中の防災・減災のために頑張っていきます。そのためにも、世界中の子どもたちが国境・人種・宗教の垣根を越えて協力し合える体制をつくっていききたいです。